

敬意を表すると共に、此機會を以て、彼經濟事情が一切の歴史事實の基調であるとするマークスの

唯物史觀を盲目的に我國史の諸相に適用し解釋せんと試みる多くの史學者に反省を促したい。

## 世界史の使命（下）

ドクトル ルード井ヒリース 原著

文學博士 坂口 昂

文學士 安藤 俊雄

共譯

### 第十一節 先史時代に於ける遠隔の海岸との海上交通の發達

の海上交通の發達

地球上の個々の國土に於て、日常生活の器具に金屬が遍ねく使用されるやうになつて來た。さうすると早くも、國際的通商及び遠方の國々への定期航海を惹き起す動機も亦た成立したのである。

今日現に尙ほ原始民族にあつては、斧、鋌、鋏、火箸及び針が武器と相並んで熱望される交易品である。それと同じやうに古代に於ても亦た然うであつた。併しそれは文化民族にあつてもだ。彼等の極めて早い時期に於ては、自分自らの領域では錫及び銅の入用を充たすこと出來なかつたから他の諸國との交通が、一しは重要であつた。それ

だから、彼等は偶然知り得たそれ々の適當な資源地として大海渡航を敢行した。こゝに商人や航海者の商賣といふものが成立し、それで、文化世界の精製品との交易によつて、まだ進歩しない國々から自分に欲しい粗製品を取り出し得た。希臘詩人は、鐵と青銅とは彼等の人民が、その價値を大昔に海外の人々の手を通じて知り得た品物だといふてゐる。キプロス(銅)の島と『錫島』(今のシリ島 Scilly Islands)とは、それ自らの名稱に於て、その鑛床が會つて世界交通に對し重要な意義を有つてゐたその思ひ出を留めてゐる。この際より、重大なことは、恰ど最も珍稀な金屬、即ち錫なるものゝ産出は、古代世界の極北なるツール(Thule)の島、即ち今のブリタニアの島にのみ殆んど限られたといふことである。既に紀元前四世紀に於て歴史家ティメウス(Timaeus)は、ブリタニアの錫貿易について記述して居る。又たディ

オドールス・シクルスは、ガリアを横きつてマルセーユに向ふ錫貨物の陸上輸送による道程の短縮よりも、錫島に達する直接航路のあることを指摘してゐる。かく歴史時代に於けると同様に、既に青銅時代及び鐵器時代に於ても、確かに、航海と國際的物資交易とは、文化を更らに廣く行きわたらしめ、その時代の遠く隔つた國々を自分のために開發利用し、かくて諸民族の間に、友誼ある接觸を促進し、且つ之を活潑に保持せしめた。正さしく古代に於ては、この航海が國際上結合のために、一個のより、好都合な手段であり、且つ後世よりも比較的尙ほ更らに重要であつたといふことは、既に歴史家ツキディデスが、その著書に於て彼の同時代の人々をして思ひ出さしめて居る所である。いづれにしても、所詮、吾々は、金屬加工の勃興以後、先史時代に對しても、當時夙に甚だ活潑なる通商關係があつたことを豫想しなくてはならな

いのである。

## 第十二節 歴史研究の史料と補助學

公共的状态の變遷に對し何等かの意義を有つてゐるすべての出來事が、之を體驗した世人の思ひ出の中に、或る程度まで精神的模寫として保持され、かくて、度々繰り返へされる物語によつて、子々孫々に談り傳へられるといふことは、遙かに文化の進んだ時代に於て始めて、吾々が期待し得るのである。この同時代人の觀察を最初に書き下したものは、吾々が久しい過去の事件の描寫のために尊重利用し得るところの最も好都合なる證據材料である。併しこの描寫の際、常に事の真相から甚だしく脱線する虞れあつたことは、明らかである。忘れられた事柄は、若干の時代を経て再び物語られる際に、既に、空想の助けを借りて纏められる。これは、いかなる報道に於ても因果連絡

の認識が最も切實な要求であるから、尤もなことである。是等の、物語そのものゝ興味のために、後から附け加へられる個々の事項がある。その上に尙ほも、特殊の内容變換が行はれて現はれて來る。それは、後世の語り手自身の考や願望のまゝにそれ相應に現はれるものであつて、その上に、若し問題そのものをまだ知らない聴衆が、之に對して眞偽の吟味を行ひうるものが出來ない場合であれば、それであればあるほど、一層自信を以て大膽に遣り遂げられる内容變換である。それだから、後世の、原本から導き出された傳説は、いつでも層一層現實から遠ざかりがちであること、また、これらの言ひ傳へが、前の叙述に比較して豊富となり、圓熟になつてゐても、その事自身が事實的經過の標幟と決して見立てらるべきでないことは、よく確證された經驗原則である。凡そ言ひ傳への連鎖のうちで、吾々と歴史把捉の直接史料

とを結びつける中間物には、いつでも、缺陷や誤謬や虚偽の分子が侵入するといふ虞れがある。歴史傳説の、この抑止し難い改竄の徑路を能く制し得るのは、唯だ次の一途あるのみ。それは、人間の記憶の裡に、尙ほ生き／＼と残つてゐる過去の事件の縮寫の本體を比較的早いうちに引つ摺むで動搖しないやうに確定さし、以てこの歴史的報道の史料に、その上の改削や竄入やが全然這入り込み得ないやうにすることである。

傳説が唯だ口から口へと語り傳へられる間は、その唯一の保存法は韻律上形式である。若し言語や文句が後世の嗜好に適應して變改されては、これが容易に保全され得ないのであるから、それはほゞこの確かな形式に極めておくことだ。それ故に古い歌謡は、自由な散文的の物語や口碑よりも、より信頼すべき史料である。自分たちの民族に、昔の思ひ出を總括して提供せうとした最古の歴史

作者等は、夙にかの弛んだ把握に於て次ぎつぎに傳承された傳説よりも、古くから傳はつた叙事詩や民謡に寧ろ好んで依頼して居た。

併し歴史的思ひ出の永續的傳承を、確實にする方法の最も重要なものは、文字上記録である。十分な信頼を以て研究して行ける時期は、時間の上でその時期に接近して書かれ、且つ吾々に理解される文字上記録が存在する時期だけだ。苟も文字の發明以前に存在するものは、その大部分は先史時代研究に委ねられなければならぬ。本來の歴史が開始されるのは、記念物上の文字が吾々に理解され、若しくば古代の記者が、過去の再建のために、確固たる根據を見出して居る場合に限る。されば歴史家にとつて重要な史料を蒐集し、出來得る限り、これらの史料を元來の姿にまで溯り究め、彼が據つて以て過去の諸變化を闡明し得べき連繫を發見するための證據材料として、これら史

料を鋭く考へて利用することは、是れ、歴史家たるもの、果さなければならぬ任務である。歴史家は、己が目的に役立つ材料についての發見法、批評、解釋、即ちその研究方法や、實際上技巧ハイステイクによつて、彼の先人たちの叙述の上に擢んで、過去の事象についての吾々の知識を豊富にし、若しくは之を補正し得ることが出来る。新時代の進むにつれて、歴史研究の或る若干の補助科學も亦た絶えず自分の働き振りを改善して、以て自ら發展して來た是等のものは吾々をして容易に夥しい材料を概観し、純眞なものを不純なものから區別しまた現實の成行に對して、吾々の有する證據材料の觀察から得られた結論の信頼程度を批判し、これを確定せしめる。この方法的攻究が實行される注意の深さこそ、凡そ科學的歴史著述が、世間に流布せる傳説を好事家式に模寫傳唱するものと、その選を異にする所以である。かくの如くして最後

に専門家の一致承認を得たものゝみが、疑ふべからざる研究の産物として提供せられ得るのである。

歴史研究は、これに必要な、極めて多い技巧及び規則を、他の精神科學、殊に言語學と、共通に有つてゐる。古代の文學上著作は、その古典的形式と、思想上所産とのために、尙ほ吾々に對して重要な教養材料を提示してゐるものだが、これらのものと同じやうに、中古の貧弱な年代記や修飾なき日時録も亦た、等しく多くは唯だ後世の不完全な寫本で保存されて残つてゐるばかりだ。それ故に、過去の歴史事實の再建に、これらのものゝ内容を利用し得るため、これらの原本の批評的出版が必要となつた。この任務は、獨逸と奧地利との出資によつて、『ゲルマニヤの歴史記念』*Monumenta Germaniae Historica* の『著作者』*Scriptores* 部門に於て、漸次果たされた。しかし次に、かく

の如く整へられた史料のいづれのものについても研究の探りを入れて、何處から、これらの史料の作者が、自己の知識を攝取したか、また、どれ位の程度に、作者が自分の認識したまゝの眞實を、公平に吾々に報道したか、を究明しなければならぬ。かくの如くして、史料解剖と、史料批判との確立から、史料學といふ補助學が建設された。紀元前五世紀に於けるアテーチの民主政治は、世界的意義を有する權力因子であり、文化の最高繁榮を展開したのであるから、古來この一小地方に於て現はれたすべての金石文が、『アチカ金石文集成』Corpus Inscriptionum Atticarum に蒐集せられ、伯林學士院によつて出版された事は、決してプロイセン國庫の濫費と思はれない。モムゼンによつて作られた『ラテン金石文集成』Corpus Inscriptionum Latinarum は、その規模の大なることに於て、他に之に勝ざるものが

ない。さうして、これで碑文學といふ補助學は向上進歩した。但しこの集成にはすべての文化國民が協力貢獻した。中古の獨逸皇帝及び國王の歴史に、確實なる根據を與へるためには、古文學といふ方法學が必要となつた。この學問は官廳のいづれの筆者をも一人く、書風上の特徴によつてまたは各々の短く區分された時代の官廳風の命令を文體の特質によつて、それく決定した。いかなる歴史家と雖も、獨逸の中古を取扱はうとするには、古文學の根本的知識がなければ、自己の研究を成就することが出来ぬ。之と同やうに、貨幣、印璽、武器などは、常に好事家にその蒐集材料を提供するばかりでなく、亦た歴史家の目的に對應する證據材料として缺くべからざるものもなつた。アレクサンドル大王の大國家の瓦解した跡に出來た國々の諸君主について、吾々に知識を提供するものは、唯だ、彼等が鑄造せしめてその

上に自己の肖像を表してゐる貨幣によるのみである。カール大帝麾下の勇士、ローランドの話を、自由に虚構した僧説だと思惟するの誤であるといふことは、西班牙に於て發見された貨幣の示すところによつて證明され、最早覆し得ないのである。

かくの如く古泉學、印章學、紋章學などの補助學は、時と共に層一層學界の承認を得るやうになつた。數世紀以來、僞造者たちが、資力ある個人

や公共機關やの蒐集熱につけ込むで一と儲けせうと巧んで來てゐるから、ごの學問の領域に於ても、愈々多く専門家の活動を必要とする。次に、

すべての變化の時點を正確に決定しておくことが歴史の把握の脊柱を形成しなくてはならぬから、過去に行はれた年代計算の種々様々の習はせを吟味することから、年代學が缺くべからざる、歴史

の補助科學として取り出されて來た。これと同様に、地球表面に關しての空間表象が、いかなる歴

史的思ひ出にも重要であるから、歴史地理が一個の固有なる専門學に發達し得た。卓越した門閥らが、自己の家系に對して有つ關心もまた歴史の思ひ出の保存に、寄與するところ多かつたが故に、既に十八世紀のグッテイングンの歴史家らが、歴史の補助學として、科學的系譜學に、特別な注意を拂つて之を養成した。

過去に對して津々として興味が覺醒されてゐるところでは、ごこでも、過去の事件や、死絶えた人間や、廢滅に歸した状態について、既に獲得された知識を、後世のために保存するてふ目的で、歴史的な古い文書が、文書館の内に蒐集堆積されてゐる。されど只新材料が絶えず附け加へられるといふこと、そのものゝために、これらの寶物全體を破損せぬやう保管する上に於て、その内の比較的古い部分には、最早十分に注意されなさいふ虞れがある。その内で、専ら、若しくば先づ第

一に、歴史研究に役立つところの文書こそ、正さしく、吾々の圖書蒐集に於て最も廣い空間を要求する。それだから、これらの文書は、いづれの文書館に於ても、時と共に絶えず起るところの避け難い場所不足に際して、そこから取り除かれたり、又は保管が悪いから、破損を被つたりするといふ危険に曝されてゐる。況んや、火災や戦亂などによつて、蒐集された數多の歴史記述の材料が再び失はれる。かくてアレクサンドリアに於ける有名な文書館は、シーザルの時に全然消滅し、また羅馬に於ては、その都がガリア人の侵入者ブルヌスに占領された際、この勃興しつゝある町に存在して居た一切過去の證據物は、全部地に委して了つた。近代でもまた、惜しいことには、十八世紀に於ける倫敦のコットン・ライブラリや、一八七〇年に於けるストラスブルグ文書館やの火災によるが如き幾多の損失を蒙らねばならなかつた。

實に、權力者たちが、自分が出來得る限り、自己に好ましからぬ歴史記述の材料を故意に破棄せしめたことも、事實起つたのである。基督誕生前二四六年——二一〇年に支那帝國を統治した秦の始皇帝は、己が創立した王朝を、自分の征服した封建諸侯の反亂に對して確保せうとの目的で、全國に命令し、前の時代のすべての文字の記念物を破却せしめた。エジプトに於ても、前代の諸君主の追憶を絶滅せうとの企てが、繰り返し行はれ、彼等の紀念物を、若しくは少くとも、その現存せる金石文中にある彼等の名を取除かしめて居る。ナポレオン一世は自分の生れた町であるアジャチヨに於て、系譜學が彼の家の系圖を復現するよすがとなるべき一切の記録を破棄せしめた。されば破壊者の手による好ましからぬ書物の焼却、或は印刷物、及びこれを再版すべき鉛版の廢絶、或は既に發表された史料の頒布及びその閱讀(例へば『禁

ゴキスリフローラム・テロヒビートルム  
制 本 目 録』に據る)の禁止などは、歴史的

知識の保存に取りては、輕視すべからざる危険を意味するものである。併しかゝる事故が這入つて來なくても、また曾て名聲を博した首尾一貫萬事俱載せる歴史著書が、寫本によつて一時代から次の時代へと、十分に傳承され、廣く頒布されるやうに、始終注意が拂はれたものでなかつたから、到頭、全部若しくは一部分烏有に歸して了つた。

殊にぶつ壞はし的關心は、若しこれら歴史著書からの拔萃を作つて、その主要内容をより、容易すくなすやうにした場合には、一層けんのものであるこの様な危険は、特に活版術發明以前、尨大な著書の騰寫本を作ることが、多大の勢力と費用とを要した時に一しは多かつた。中古に於ては、古い文書が耐久性材料(羊皮紙ペルガメント)であることから、屢々この文書に對し無關心となつた所有主は、その表面を滑らかに削擦つて、その上に再び文字の記載

に用ひ得るために、その原文全體を抹消した。かゝる『重書寫本』にあつては、最近に於て屢々現在明白に現はれてゐる文字を、化學的方法を以て除去し、かくて前に抹消された原文を讀み得るやうにしたので、かうせねば亡失されたであらう筈の史料が、再び蘇み返らさせられた。されどまた、多種類の寫本に接手し得る史料にあつては、各謄寫者の誤謬や脱漏を除去するため、細心の比較と、いろ／＼の改善(訂正)を必要とする。近代の出版者は、缺損の場所に於ては、『推測』によつて、本來の語呂を考へ當てねばならぬことがしばしばある。それでこそ始めて、手寫本に現はれたまゝのところへ、一個の合理的の意味を持ち來すことが出来る。

本來の『史料』は吾々に或る過去の影像を示さうとするものであるが、之と相並んで、過去の遺物なるものが、文字の豊富な使用以來、歴史研究の

ために多大なる價值を有するものになつた。この遺物とは、その内に人間の思ひ出を左右せうといかなる思惑もなく残つてゐるものである。かゝる實際上の目的に役立つ記事は、事件の連繫を説明せうとの意志を有つてゐる物語りの史料よりも事實の叙述の信頼程度に於て、多くは遙かに優ぐれてゐる。即ち古文書、書簡、法令文書、事務書類、官廳記録などが、第一着にそれであつて、これらのものは種々異つた時代から獲得され、文書館に於て多かれ少かれ注意して保管されてゐる。併し、その上に、地理上名稱、都會及び村落の遺跡、吾々の國語語彙中の外來語、民族的習慣、諺なども亦た、これらのものを成立せしむる標準となつた事件について、信頼すべき痕跡を含み得る成程、これらのものが今再び組み立つべき遠い過去の建築の上に投げる光明は、唯だ飛びくに孤立した連絡ないものに過ぎない。しかし、彼等は

直接に吾々の眼前に存在し、何等の物語り人の中間介在によつて害はれて居ないから、一しほ信頼の出来るものである。羅馬の子守女らが、小兒を靜めるために使つた『ハンニバルが門アンテポルタス前に』といふ呼びかけの語は、このポエニの統帥が自分の戰略失敗に歸した地位を、一個の虚勢的運動で挽回せうと力めた當時、この七丘の都に擴がり亘つた大恐慌を、ありくと吾々に實證してゐる。

著しく感知される史學の缺點は、その證據材料が、すべての時代、民族、事件及び状態に一樣にゆき亘つてゐないで、多くの場所に於ては恐ろしく缺陷があり、その他の場所では殆んど見渡しの出来ない程充滿してゐることである。これは吾々が比較的昔の時代からは、可成の範圍に於て、尊き材料を得てゐるけれども、比較的後の時代に對する證據が、吾々に失はれたといふことは、ほんの偶然の出來事に基づくこと甚だ多い。屢々新ら

しい發見があつて、吾々が以前に少しも知らなかつた過去の上に、突然明るい光を投げることがある。それで、實に前述の如く、古代文化の所在地に於ける新らしい發掘によつて、歴史時代と先史時代との限界が、幾千年も繰り上げられた。歴史の定まつた區域に對する材料が乏しければ乏しい程、層一層周到な用意が必要であつて、それで以て吾々の證據材料の明證すべき特性から、吾々の注意が向けられ、而もまた光明の影うすい過去現實の個所への結論を、導き出さねばならぬ。併しまた、最も好都合の條件の下にあつても、歴史家の記述しなければならぬ事件の縮圖に於て、彼の因果の正しい連絡がうまく成功し得るといふ場合は、唯だ、彼がその作業に當りて間斷なく、あらゆる事情を用心ぶかく考量し、人物及び事柄を厳正に批判し、よく觀測の標準を保つてゆく時のみ限られてゐる。歴史研究の際には成熟した人生

經驗と現代についての知識とが、常に攷々として當該證據材料を、精細に取扱ふことと相並んでゆかなくてはならぬ。經驗が殖えて來れば、それだけ、歴史家は、從來既知の歴史的諸現象間の、證明された連絡を出發點として、よしや當時認識源泉の流れが乏しくても、その中でよく可能的若くば蓋然的因果連繫を見付けて、それから結論を引き出すことは、一層出來易くなるだらう。さうすると明晰な類オプティミスム推は、あらゆる深遠な歴史的認識へ到達する橋梁を形造る。それ故に、どんな歴史家でも、自己の人生經驗、一般教養、特殊なる個物知識、及び以前からの研究などから、意識的に若しくは無意識に、いろいろ、自分に積み集めた意識材料ベグストライニマテリアルといふもので、證據材料に對する一個の新らしい且つ往々重要な認識源泉を提供するのである。随つて歴史家は、自分の精神力の全體で對象を捉み、自分の同僚や特殊専門家の準備的

若しくは共同研究の自分に教ゆる所に鑒み、之を適當に評價利用するために、全く自分の研究對象そのものに沈潜しなければならぬ。彼はかくの如く、從來既に彼の對象把握の際、發表されてゐる種々の印象に對して、極めて高い感受性を要望されるのであるけれども、而も他方では、彼自身固有の意識材料の豊富さ明晰さそのものに於て、彼が、確實な手際を以て、現に行はれる歴史上の定説〔流行せる意見〕中、謬れるものを真なるものと及び正當なもの勝手氣儘なものを差別し、彼の對象に關係してなされたる有らゆる考察の成果をして、自分に出來得るだけ眞理に接近せしめる能力が存在しなくてはならぬ。史學の溜池には、昔の研究者たちの既に闡明して置いたすすべてのものが、流れ込むのである。かくの如き學問の名に於て、歴史家は、彼の主張を立てねばならない。されば彼自らの業績は、過去に關する吾々の知識に

對して、一個の新たなる増加であり、且つ、吾々の有する歴史的知識を研究者や歴史同好者に頒ち與へる諸の科學的勞作の中に於て、その一つとして數へらるべきものである。かくの如くして、全體成果が何の疑を容れる餘地もなく、普遍的に満足するに到つたならば、こゝに歴史のこの部分に關しては、あらゆる歴史的**研究及び叙述の目的**であるところの**普遍妥當の確説**〔コンミューニカチオン論〕が形造られるのである。

凡そ對象はその内面的豊富さの無盡藏なるものである。それだから、いかなる包括的の歴史叙述でも、研究の結果の全體を傳へることは極めて困難である。況や世界史をや。歴史家は、自分が踏み出すことを許されない埒内の輪廓の廣狭に應じて、あまり重要ならざるものを省略せねばならぬかくしてこそ、決定的事實や最も意義ある生涯は愈々明白に取出され、且つ愈々容易すく確保され

る。彼は自ら熟慮して、諸の事件の連繋に於て如何なる要素を特に卓越せしめ、如何なるものを省略すべきか、について、判断を下さねばならぬ。

歴史家の、この方面の活動に當つて、彼自らの有する世界観と人生観とが自然に重きをなして來るこの際往々にして、彼は自分の個人的存在の、彼にとつて極めて重大な關心の糸に觸れられて、其鳴同情に惹き入れられることがある。自己の思想を壓迫する誘惑から自己を解放すること、對象についての純粹なる觀照を害ひ、且つ彼の叙述中に曲筆と偏頗心とを持ち來すところの一切の狹量な顧慮を超越することは、是れ歴史家たるものの最も重要な任務の一つである。すべての歴史著作は、その原理上からいへば、客觀的で普遍的であるべきである。然るに、若し彼にして、個々の場合に於て、己の使命に對し眞面目に忠實でありさへすれば、避け得られたであらうと思はれる注目

すべき缺陷を示すならば、彼は或る確かな程度まで主觀的で、且つ制限されてゐる歴史家になるであらう。若し彼が或る一定の利害總合のために一個の偏頗心を抱き、それがため彼の歴史研究に實用する史料の批判及び解釋をして、遂に眞實を枉

げしめ、彼の叙述に於て僻見を生せしめることが明白となるならば、吾々はこれをその歴史著作者の『傾向』と名づける。このものは、それがより強く現はるれば現はれるほど、愈々、彼の著書の價値を害ふのである。但し、自分の材料を支配する歴史家が、正さしく自己の同感や反感やの偏頗心によつて、先人の看過した特殊の事情を闡明し、かくて吾々の知識を増し、若しくは彼の對象に對する興味を高めることも、勿論起り得る。併しながら一般的にいはず、凡そ歴史家たるものが、苟も過去についての判断を使命とする以上、自己の個人的存在の束縛を超越し、また自己の及

ぶ限りの技能を以て、自己の撰擇せる主題の輪廓内に入り來るべき出來事や、行爲や、人物やについて、一個の全然眞實であつて、どうしても信ぜざるを得ない程忠實な影像を描くといふことは、是れ一個の當然な願望である。(完結)

正 誤

第六卷第三號

頁	段	行	正	誤
四〇七	下	九	包抱	抱括
四〇八	上	五	人物に於ても	人物でも
四〇八	上	六	發見し	興へ
四〇八	上	四	努めるならば	するならば
四〇八	上	七	處世	處生
四〇八	下	六	關心が	關心を
四〇九	上	八	各自	それら
四一一	上	四	之を	之を
四一三	上	五	子供に	子供を
四一三	上	六	身持を	身持に
四一四	上	三	國民史の中で	國民史の中で

四二一	上	二	業績が	業績は
四二一	下	五	文化史は	これは
四二二	上	五	關係を	關を
四二三	下	二	激しく	激して
四二六	下	三	創造すること	創造するか

第六卷第四號

五六一	上	三	複合體	複合體
五六四	上	二	得ないとする	得るとする
五七六	上	八	については、	を越へては
五七六	上	十二	特に	時に
五七六	下	二	間隔距離の内に	間隔距離で
五七六	下	一三	つづくかも	つづくかが
五七七	下	一〇	學問の部門	學問一部門
五八一	上	八	肩部	肩部
五八一	下	二	歐羅巴人を	歐羅巴人を
五八三	上	一六	陥らざる	陥らざる
五八五	下	三	鎖脈の	鎖脈が
五八五	下	二	人間	人間
五八八	上	八	ケルンテン	ケルンテル
五八八	上	一六	山脈の鐵鎖	山脈のる鎖